

まえがき

本書は、昨年出版した『ライフサイエンス英語類語使い分け辞典』に続くシリーズ第2弾である。前著は、生命科学分野の論文でよく用いられる重要単語を意味によって分類し、そこから文脈に最適なものを見つけることができるよう工夫したものであった。ただ、スペースや構成の都合から個々の単語の使い方について十分には示すことができなかった。本書は、前著とは全く独立したものだが、この点を補うべく個々の単語の使い方に着目して詳しくまとめた活用辞典である。

本書の製作にあたっては、ライフサイエンス辞書（LSD）プロジェクト（<http://lsd-project.jp/>）のデータベースを再吟味して検討し、さらに内容の充実に努めた。単語の使い方は実際の文から学ばなければなかなか理解できるものではないが、かといって1つの例文を見ただけでそれを理解することも不可能である。通常、1つの単語にはさまざまな使い方があるので、相当数の用例を調べてもなかなか全貌を知ることはできない。しかし、このような単語の用法を体系的に知る方法として共起表現を調べる方法がある。共起表現とは、ある単語の前後にどのような単語がよく用いられるかということだが、ここに単語の用法のエッセンスがあると言ってもよいであろう。もちろん直前直後だけが重要であるわけでもなく、また、特定の決まったパターンだけが使われるわけでもない。そこで、いろいろな表現をできるだけ収集して出現回数を示すことによって、単語の使い方を包括的に理解できるように製作したものが本書である。

本書の大きな特徴は、論文でよく使われる単語の共起表現（連語表現）の使用回数を調べて用例と共に収録したことである。例えば「～の変化」という場合、日本人は change of を考えがちだが、実際には changes in の用例の方が圧倒的に多い。それを使用回数を明示することによって具体的に示した。このような名詞+前置詞、動詞（過去分詞）+前置詞の組み合わせには、決まったパターンが用いられることが多い。involved in, associated with, related to, required for,

derived from, lead to, depend onなど過去分詞/自動詞+前置詞のパターンがそれに相当する。このような論文でよく使われる共起表現を攻略することが科学論文執筆のための大きなポイントとなるはずである。

論文における単語の使い方にはさまざまな特徴がある。英文の述語の中心となるのは動詞であるが、論文では他動詞受動態の用例が非常に多い。受動態であるので、過去分詞の後は by が来ると思われがちであるが、実際には「by + 意味上の主語」は省略されることが多い。その代わりに上述したような多くのよく使われるパターンがあり、また、過去分詞+前置詞の使い方には一定のルールがある。しかし、なぜ related の後には to が用いられるのに、correlated には with が用いられるのかなどを説明することはかなり難しい問題である。共起表現検索で抽出できる単語の組み合わせは無限にも思えるが、よく使われるパターンはそれぞれの単語ごとにだいたい決まっており、しかも単語ごとにユニークである。本書では、このような組み合わせを個々の単語ごとに頻度情報に従ってパターン化した。日本人が苦手とする前置詞との共起表現は特に重点的に示してある。ある単語の次にどのような前置詞を用いるべきか迷ったときに参考すると大いに役に立つであろう。また、動詞+前置詞だけでなく、effect on, treatment with, evidence for, significantly reduced, mechanisms responsible のような名詞+前置詞、副詞+動詞、名詞+形容詞などさまざまなパターンがよく使われるものから順に並べてある。一般の辞書でこのようなことを調べることは困難であるので、本書は生命科学分野の論文や学会抄録を執筆するうえで、今までになかったきわめて有用なツールになるであろう。十分に活用して洗練された論文を仕上げていただけることを切に願っている。

2007年9月

編著者を代表して
河本 健